

台湾向けナシ穂木の輸出が急増

台湾では近年特に高品質な日本ナシ等の温帯ナシの需要が多く、現在では、全生産量の90%以上を温帯ナシが占めるといわれている。

温帯ナシの生産は、台湾の平地では気温が高く、栽培に適さないことから、標高1,500メートル以上の高地でしか栽培できない。このため、1970年代にヨコヤマナシ（花芽分化の低温要求度が低く、平地での栽培に適した台湾在来種）に温帯ナシの花芽を高接ぎし、温帯ナシを生産する技術が開発された。反面、高接ぎのための穂木は毎年確保しなければならず、国内の高地からの供給だけでは不足するため、日



本、韓国等の国から盛んに輸入されるようになった。その結果、台湾のナシ園に高接ぎによるウイルス病が多発したため、台湾は1983年にナシ穂木の輸入を禁止した。しかし、禁止後も不正輸入が

絶えなかったため、1988年、輸出国でのウイルス検定等一定の条件を付して日本産ナシ穂木の輸入を解禁した。

日本からの穂木の輸出は毎年増加し、輸出初年度は福島県の2.6トンにすぎなかったが、1997年は7県から99トン、1998年には131トンが輸出され、本年は11県から、豊水、幸水、新興等5品種の穂木180~190トンの輸出が見込まれている。

海外のニュース

米国でトウガラシウイルス病の謎の大発生

1999年7月、米国のトウガラシ消費量のおよそ半分を生産するニューメキシコ州南部で、トウガラシウイルス病の大発生が報じられた。今回の大発生では、全栽培面積の約80パーセントのトウガラシが、茎が萎凋し、わん曲するという被害を受けた模様である。本病はcurly topと呼ばれているが、不思議なことに、国境をはさんだメキシコ側のトウガラシ畑では、ほとんど同じ地理的条件であるにもかかわらず、本病の被害がなく、米国側のみ被害が大きな謎とされた。そこで、米国専門家は直ちに本病の原因究明を行った。

ニューメキシコ州立大学による調査の結果、本病の病原体は、テンサイヨコバイ (*Circulifer tenellus* 本誌第22号参照) によって伝搬される beet curly top virus であることが判明した。curly top病がこの地域で大発生することはこれまでなかったが、本年はトウガラシの生育初期に、州南部が強い風と寒波に襲われたため、トウガラシの抵抗性が弱まり激しい被害になったものと考えられた。また、州農業家畜局は、メキシコ側で発

生がなかった理由として、メキシコでは米国で禁止されている殺虫剤を使用できることをあげている。

現在、国際ウイルス分類委員会 (ICTV) は、このウイルスを *Geminiviridae* 科 *Curtovirus* 属に分類している。

本ウイルスは、テンサイヨコバイにより永続的に伝搬され、トウガラシ、トマト、ジャガイモ、ホウレンソウや多くのウリ科及びマメ科植物などに感染する。トウガラシがこれに感染した場合、葉が上方に巻き、しだいに硬く黄化し、根はえ死する。また、果実はほとんど付かず、収穫は見込めないとされている。

本事例は、ウイルス病の発生が環境に大きく影響されることを端的に示す例として注目される。

(AgNIC ProMED-mail; <http://www.agnic.org/pmp/1999/ctd0707.html>)

発行所 横浜植物防疫所
〒201-0003 横浜市中区北仲通5-57 横浜第二合同庁舎 ☎(045) 211-7155
発行人 古茶武男
編集責任者 江口寛明
印刷所 内村印刷株式会社